

譚叢

洋畫家の演劇觀

吉岡芳陵

《黒田清輝氏談話》

◎我邦の演劇は自から『日本の演劇』たる一箇の標榜を以て進むべきである、即ち適當なる改良を施して日本演劇なるものを發達せしめて往かなければならぬと思ふ、

◎黒田氏は今春歌舞伎座に加藤の毒饅頭と藤倉岩之丞との演劇を觀た、之が生れて始めての芝居見物だそうなが氏の緻密なる觀察力は終に雲煙過眼に了らずして幾多の批評を齎したのである、而かも氏の意見は飽までも日本演劇の價値を認めながら其改良發達を圖るので、彼急激論者の其れと異りて頗る穩健である、曰く、

演劇改良の發足點……好比喻

◎今第一に改良の必要もあり、又改良の敢て困難ならざるは舞臺の裝飾だと思ふ金ピカの衣裳を着けて立派の役者が一生懸命に藝を演つて居るのに、其場所はいふと或は天井もなく、或は後ろの樂屋が見へ透く、安雜さまの屏風のやうな襖の御殿や何かで、四邊の裝飾の亂暴なるとは實に言語同斷である、要するに少しも此等の中には注意して居ないらしい、

◎アノ立派な役者が斯ふ云ふ不體裁の中で藝を演て居るのは、丁度大禮服を着たものが「おでんや」で立食ひを爲て居るやうなものだ、

書割の下圖……舞臺の道具……向島の遠見

◎西洋の劇場しばゐのやうに舞臺を少し斜面にして奥の方を高くし、而して書割は遠近法に依りて物の割合が要るから此等の要素ある西洋畫家に畫いて貰ふ、……但し其下圖だけを畫いて貰へばよろしい、其下圖に従つて濃淡を附け塗抹すれば宜い、是れは從來の書割畫きにも出来るだらう、

◎立木なども憇たまじい造り物を出すから妙なものが舞臺に現はれるので、其枝などは矢でも立つて居るやうで眞の立木らしい感じがしない、其間から役者が出て來ても森の中から出て來たといふ心地がしない、

◎此れなども道具でなく書割で往くが宜い、洋式の下圖に據つた書割なら眞の立木らしくも見へ、枝が茂つて居るやうにも見へ、其中から實際に出て來るといふ感じもして藝が引立つといふものだ、

◎舞臺の道具にしても之を持運ぶものとか、其の周圍まわりを示す必要のあるものは道具を用ふるの要があるが、左様でないものは書割で事が足りる、

◎先達て歌舞伎座で演つた二番目狂言藤倉岩之丞とかの事の何の幕であつたか二階からの遠見に向島の堤とせを書割にして見せて居たが、全然遠見まるごとに爲つて居ない描き方のものを置いたものだから二階の前に直ぐ向島があるやうに見えた、此等も其遠きに應じた描き方を得たる書割であつたら、眞に逼つて何の位好い幕に見られたか知れない、出る役者も何んなに引立つて好かつたか知れないのである、

◎ソウして其堤の下に舟があるのだが、其舟が少しも動かないので肝心の墨陀川の景色が活きて見えない、此れが西洋の芝居なら水の所を巻くのである、左様すると其船が動き河の流も流のやうに見えて墨陀川といふ感じがする、

青天井の下か相撲小屋か……西洋の棧敷

……日本の劇場

◎道具立の亂暴なると、もに一向度外に置いて顧みざるが如きは彼の光線の一事だ、舞臺の横からも棧敷の後ろからも右より左より日光が遠慮會釋もなく入つて來る、往古青天井の下で芝居の濫觴が演ぜられて居たころなら格別、今日に至つて殆んど青天井の下か相撲小屋の中か何かで芝居を演つて居る如きは馬鹿な話しだ、

◎殊に電燈といふ如何なる光線でも取り得らるゝものがある今の時代に此の有様は迂遠極まる話しだ、

◎西洋では開幕の間は觀客の方を薄暗くして舞臺だけに電氣で自由自在に光線を與へて居る其上外から日光の漏れぬやうに充分の上に充分の準備があつて、棧敷の後ろは「ボックス」の後ろ戸の外に少し許りの廊下を置いて戸が立てられて居る、ツマリ二重戸になつて居るのだ、

◎空氣抜きは何ふにでもして充分に取れるから、斯ふ云ふ工合にまでして戸外の光線を入込ませないやうにすべきである、西洋に居た内に日本には歌舞伎座といふ洋風建築の劇場しやまが出来たといふことを聞いたから、何んな立派なものかと思つて居たら、今實際に觀るに及んで此れかと驚きに堪へなかつた、

◎氏の驚いたは尤もな話しだが、今の歌舞伎座が斯くの如く疎末であるのは同座が建てられた時勢が時勢であつたので、謂はゞ時勢の罪か、其頃は中々物の内容にまで精しく立入つて何ふの此ふのといふ世間ではなく、其の外部が多少西洋造りであれば徒らに改良隨一の劇場として歓迎せられたのである、

◎今日になりてさへも、舞臺の粧飾光線等を喧ましく云ふのは實のところ、觀客の最小部分で、其所謂改良か多少

實行されるのは何時の事やら分らぬ有様、況んや十餘年前の當時おやである

廻り舞臺………花道………子役の聲………臺詞せりふ

調子の不統一………自分丈けを見せる

◎廻り舞臺と花道とは、急激の改良論者中には今の時代に廻り舞臺などを用ふるものはない、花道も不必要だと論ずるものがあるが如きも、氏は少しく之と選を異にするやうだ、

◎廻り舞臺も絶對的に排斥する所はない、或る必要の場合に於て之を用ふるは大に可い、唯だ今日の我芝居の如く其場の變るところで幕を引く代りに之を使ふなどは愚な話しだ、

◎譬へて言つて見れば、舞臺の役者が其の場所より或る他の場所まで歩み行く心で歩きながら舞臺の廻るなどは廻り舞臺を至極適當に用ふるので、彼の引返しといふやうな場合に之を用ふるは不必要な話しだ、アレなら幕を引いても宜いのだ、違つた道具立の場所を二つ、一と幕の中に併せ見せるといふ必要はないのだ、一寸氣合ひも抜けるし且つ一と幕うち中でありながら違つた場所を二つ續けて見せるといふのもおかしな話だ、

◎花道はあつてもよからう、演劇げんげきが中々面白く往く場合がある、

◎氏は次に子役の聲に就て評した、要するに氏は始めての芝居見物としては頗る斬新なる觀察を遂げたのである

◎役者の上に就ては種々感じたこともあるが、其中の二を云へば、子役の聲の調子が如何にも不自然だ、相手の役者はいろ／＼に變つて、自然の調子で話すともあるのに、子役となれば何れも／＼同じ鑄型はまに適つた二種の聲を出すのは甚だ可笑い、

◎立役にも女形にも、同じ舞臺の上の調子ながら夫れその役に應じて其調子も變り、役の品位から人物の性格を現はすのであるが、子役は高貴の身分であるうが町家の子供であるうが、其聲の調子は皆全く同一で少しも其區別がない、子役の臺詞の言ひ方に就ては最も研究が至らなかつたと見へる、

◎觀客が既に聞き慣れて居るのと子供に對する感情とに掩はれて氣附くものなく、譯もなく涙を以て之を迎へて居るが是れからは、追々觀客も承知して來まい、

◎臺詞の調子に就ては子役の上計りでなく其外にても、世話狂言の中でありながら其言ひ方が兎角自然の調子に一致しないのがある、芝居の調子で云ふものもあれば普通の調子で話すものもある、彼是れ打ち混じて一ツの舞臺に聞かれるのは甚だ耳障りになる、此等はチャンと一致して貰はないと困る、夫れから、

◎全躰を通じて、役者は何ふも自分丈けの藝を見せるに勉めて居て他と相和して芝居を見せるといふ注意が充分でないやうだ、

曾我の對面の型……………踊りの素養……………

演劇、舞踊の別

◎型では中々好い型もある、彼の曾我の對面で五郎が十郎に留められて肱を張る姿と、それを十郎が手を伸ばして留める姿とは何ちらも實に立派な型であるが、一遍にして置けば宜きものを、同一の姿を繰返し過ぎるは、少しくどく感じた、何ふとか變化がなければ面白くない、

◎踊りの素養の有る無しに就てはよく舊俳優と新俳優との間に争ひがあるやうだが、成る程踊りの素養があれば

こなしなどに總て好いかも知れない、然し踊りの素養が無いからと謂つて演踊しほみが出来ないといふ譯はない、俳優は是非とも踊りの素養がなければ俳優でないといふことは、謂へない、

◎演劇しほみと舞踊とは別物であつて、舞踊えんげき必ずしも演劇に要するものでない演劇は演劇、舞踊は舞踊で、予は日本の芝居が『踊り』即ち所作を中に挿むのを如何はしく思ふ踊りが見たければ舞踊の會に往くが宜いマのた、目先きを變へる爲めにも所作の取合せのある方が宜いといふ人もあるが、目先を變へやうと思へば場外に出て外の景色を見るが宜い、芝居は演劇を觀に來る場所なのだから……………

舞臺の死に方……………西洋の黒ン坊

◎川上の貞奴が西洋で舞臺の上の死に方が如何にも眞に迫るので評判であつたは人の知る所だが、ソレを舊來の俳優がするのを見ると實にうまいものだ、西洋では唯だ斬られ、ば其處にペチヤンと仆れて仕舞ふ計りて、死んでから手足のつる工合などは實に日本俳優の專賣であるが、また妙なところを研究したものだ、

◎日本の芝居では死骸を片附けたりなどするのは黒ンぼうとか言ふ覆面黒衣のものだが、西洋では金釘を胸に附けた奴が出て斯ふ云ふとを爲て居る、

舊劇派と新劇派……………寫實の弊……………

眞假の兼合い

◎日本では舊劇派と新劇派とがあつて、新劇派とは多く壯士役者のとを云ふやうだ、而して舊劇派は多く或る鑄型に依りて演し、新劇派は寫實主義に往くやうだが、此の寫實主義に就ては餘程注意を要する、

◎無暗にほんとうの、戦争を見るやうだとか、喧嘩などは舞臺の上の喧嘩とは思へない、まるでほんものゝやうだなどゝ云ツて壯士芝居を賞めるものもあるやうだ、演て居る俳優も飽まで真に至らんとを期して居るやうだが是れは甚だ間違ツた話した、

◎畫で云ツても自然其儘の直寫では繪畫の繪畫たる値がないと同じく、演劇も真に即くが如くして之を離れて居なければならぬ、單に眞物ほんもののやうなのが好いといふなら、道端でほんとうの熊公八公の喧嘩を見るが宜いのだ

◎真に近くして而して假で演劇といふ伎藝の趣を有ち居ツて始めて演劇の値があるのだ、此れは新氣運に嚮ツて往く劇界の餘ほど注意すべきとだと思ふ、

『新小説』八十二明治三十六年二月

黒田の演劇観を吉岡芳陵がまとめたものだが、内容的には同年春に掲載された「日本芝居の初見物」(本書九九―一〇六頁)と重なるところが多い。